

大峯 巖所長就任

(分子研レターズ編集委員会からご挨拶をお願いしました)

16年ぶりに分子科学研究所に還って来ました。私が助教授時代の11年間を過ごした新生期と比べ、研究所は緑が深くなり雰囲気も落ち着き岡崎の街に溶けこんでいます。35年前、若い研究者がこの岡崎の地に集まり、創成期の溢れる熱気を持って研究を始め、多くの人に支えられながらこの新しい学問を大きく成長させ、研究所を世界の分子科学研究の中心地へと発展させていきました。多くの画期的な研究が行われ、日本の分子科学研究を支える多く(数百人)の人材を輩出してきました。しかし創設以来35年経った今、初期の目的とした学問は成熟してきており、分子科学研究所は次の時代に向かって飛躍する時期にさしかかっています。

分子科学は、分子がつくりだす多様な自然の現象の源を探り、またその知識を基に新しい物質機能を創出しようとする学問です。分子の「力」を探る分子科学は、生命・宇宙現象などの広範な自然現象の研究、また工学、医学など我々の生存を支える多くの学問の基礎となるものです。たとえば、生命現象の解明が大きく進んできていますが、その基礎となるのは、ミクロレベルで、分子集団がシステムとしてエネルギー・“情報”を交換しながら連携し、生命の機能を生み出す分子集団の調和ある反応過程です。このような分子システムの機能発現の機構を探ることは、生命現象の源を明らかにするの

みならず、分子機械などの機能化を可能にしていくと思われれます。ナノスケールからマイクロスケールの高次階層の分子システムの機能発現の機構に関する研究は大変重要であり、多くの関連学術分野の研究に影響を与えると同時に、全く新しい完全にグリーンな有機反応の開発、また革新的エネルギー・情報技術へなどと繋がっていく可能性を秘めています。このような「ポストナノ」とも呼べる分子システムの研究を、分子科学研究所がこれからチャレンジしていくべき研究の一つの大きな柱としたいと思います。

さらに、分子系の超精密制御(超短時間制御)や超微細構造分子計測、分子のエクストリームな状態などに関する研究は、分子科学研究所が長年培ってきた誇るべきものであり、ポストナノサイエンスの研究とともに大きく発展させていきたいと思えます。

大学はそのもつ学問の多様性に基づいて新しい学問を作り出していく場であり、一方、研究所は特定の学問の深化を極め、その結果、生まれてくる新しい学問的な広がりを目指していく場であると思えます。この岡崎の深い緑の中から次世代の核となる学問を生みだし、世界のトップインスティテュートとして輝いていくべき新たな出発点に、分子科学研究所は今立っています。皆様のご支援とご協力をお願いいたします。



大峯 巖 おおみね・いわお

東京大学出身。米国ハーバード大学で学位取得後MIT、慶応義塾大学を経て、分子科学研究所助教授として11年間在籍、その後、名古屋大学教授、理学部長、理事を歴任。さらに京都大学福井謙一記念研究センターを経て、2010年4月から現職。Ph.D



所長室：研究棟222号室に所長室が復活しました。山手地区が整備されるまで居室不足で他に転用され、長らくそのままになっておりました。大峯所長によると、所員との議論、歓談の時間をできるだけ持ちたいので遠慮せずにドアをノックして下さいとのことです。